

諦 崇 寺 報

諦 崇 寺 発 行
藤 井 崇 文 編 集
〒631-0065
奈 良 市 烏 見 町
2丁 目 28-10
0742 (37) 2569
taisouji.jp



「禅語」学ぶ

心豊かに生きる「マント」

2月28日に平城東公民館で『禅語を学ぶ』心豊かに生きる「マント」と題して講話しました。この演題は公民館の担当者さまから提議していただいたもので、私自身も準備をしながら、禅語や「心豊かに生きる」とは何かを考えました。

禅語とは何かを考えていくと、禅とは何かという問いになります。私の狭い知識で端的に言うならば、禅とは「生活の中で仏さまとまっとうに、仏さまとしての生き方」です。

「仏さまはいついて仏さまの心、それは『お経を読んだら』から『でもな、』坐禅をしていくから『でもありません。仏さまは何をしていても仏さまのお姿をあらわすから仏さまなのです。』飯を食うるときに食べ散らかすのは綺麗に食うのと、どちらが仏さまのお姿であるか。お釈迦さまの時代に車はありませんが、暴走運転と安全運転、どちらが仏さまのお姿か。つまり、私たちが口癖において仏さまの教えを実践して、私たちが生活の中において仏さまのお姿とまっとうに、これが禅の目指す生き方です。



禅語を含めた仏さまの教えは、私たちがよく立ち止まり、心のありようを整える、心の標識みたいなものです。離れて暮らす子供へ届く、お母さんからの手紙のようなものですね。「頑張っているか、頑張っているね。身体に気を付けてね。」だったり、親の心配することから「あなた勘違いして悪いことをしてないよ。悪いことは絶対にしてないでね。」だったり、子供を気にかけて、心配して、日々の生活が健やかなことを願う、お母さんからの手紙と同じです。

現代において私たちが禅に惹かれるのはおそろしく、多過ぎる物事に訳が分からなくなっているから、たくさんある物事に囲まれ、中心がどこか分からなくなっている。たくさんあることが豊かだと思ひ追いかけてきたが、もしかすると追いつかれていくのではないかと心のどこかを感じている。「色んなことがあるのはよく分かった。だけど本当のところはどうなのか教えて欲しい。先人が残した禅語に触れて、清々しい思いを味わいたい、心を打たれてみたい。久しぶりに親から叱られてみたい。」「そんな気持ちになったのかも。

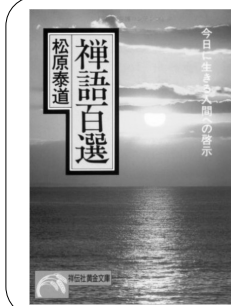
注意しなければならぬのは書店には『ホッとする禅語』や『心が軽くなる禅語』といった本は並んでいません。なぜならそんな気難しいタイトルでは売れないからです。けれども、私たちが慰めてくれる禅語もあつたのです。私たちが叱ってくれる禅語もまた、私たちが救ってくれる大切な教えです。

禅語に触れることで、自分のお父さまやお母さまのお顔を思ふ輝かなくて、とどろき返られたりしてしまいます。

『禅語白選』

松原泰道 著

一九八五年・祥伝社黄金文庫
五五三元(税抜)
柔らか過ぎずも硬過ぎず、初めに出会いでもらいたい本です。一しすの解説は短くですが、そこから噛みしめるときかけとなる一冊です。



眼横鼻直
目は横へ、鼻は縦へ、ただそれだけ述べた言葉です。私たちが違ひを見つけることが得意です。「私の眼は一重だけれど、あなたは二重でうらやましい。」「私は鼻が高いけれど、誰々は低い。」「私に比べて、違ひははかり目がいきます。ところが反対に同じこと、言い換えれば当たり前のこと、気が付くのが苦手です。禅語は私なりに大きく分けて「大自然」系と「戒め」系があり、眼横鼻直は大自然を感じています。大自然こそが法であり、大自然を考へる根本とするならば、迷ふ苦しむことにはありません。「自分の勝手な考えではいけない。自分の目で好き勝手に見るのではなく、仏さまの目となって物を見なければ、早く気がついて実践しなければ、親の優しい眼差しです。」

脚光照顧

足もとを照らして顧みながら、これは二つの意味が考えられます。「一は、」段差があつたりしてしまひかならずつた、こけなすように注意しながら。」「二は、」想像でおろし調子に乗ってついたら、自分勝手に続けていたら、失敗するぞ。」「親の厳しい戒めです。」

もう一つは、」想像でおろし調子に乗ってついたら、自分勝手に続けていたら、失敗するぞ。」「親の厳しい戒めです。」

さて、「心豊かに生きる」とはどういうことか、考えてみます。「不殺生」という語があのまま。これはただ単に自分も誰かの命を奪わない、殺さないというのではなく、命を生かしながら、親の想いが込もっています。親が教えてくれたこと、先人が残してくれた智慧を学び実践して、そして次の人に伝えていく、これが「生かす」ということ。「殺さぬ」ということです。

私たちが、」学んだ者の責任として、必ずあの人に伝える」ともって真剣に考えねばなりません。それがそが人の営みであり、習ひではないでしょうか。自分は教えたもつたのに、次の人に伝えなならない、宝の持ち腐れです。そうやって、あの人に伝えていくことに力をつけて、自分は先に逝くかも知れないけれど、あの人が必要受け継いでくれる。「と感じることが出来れば、自分の心のあつち、心の豊かさが繋がっていくのではないのでしょうか。」

先人たちは、私たちが心豊かに生きられるようにと、たくさんマントを伝えてくれました。今度私たちが「次の世代に何を伝えていくべきか」を考へる番です。心豊かに生きるマントは与えて貰うばかりではなく、後世に伝えていくべきものであると感じました。

あとがき

正阿子規は『病牀六戸』に、「余は今まで禅宗のいはゆる悟りといふ事を誤解して居た。悟りといふ事は如何なる場合にも平気で死ぬる事かと思つて居たのは間違ひで、悟りといふ事は如何なる場合に平気で生きても居た。」「と記しました。病床にあつた子規が思ひ至った境地、その言葉です。私たちが調子の良いとき、平気で生きています。」「ついで死んでも構わぬ。」「なんてそれで調子の良いことを言つたりもしています。けれど調子の悪いときこそ、平気で生きていくことが肝心である。」「

崇文 拝